

COBALT-SERIES

# リング♥どりいむ

女子プロレスは華やかに  
藤本ひとみ



---

ふじもと・ひとみ

本名、藤本ひとみ。1951年生まれ。蠍座，A型。飯田風越高校卒業後，少女少女まんがの原作を書き，第4回コバルト・ノベル大賞を受賞。少女まんが作品には石井まゆみ氏と組んだ『あこがれコレクション』，はざまもり氏と組んだ『赤の旋律』等。コバルトシリーズに『愛からはじまるサスペンス』がある。

---



リング♥とりいむ

COBALT-SERIES

---

1985年10月15日 第1刷発行  
1989年2月15日 第16刷発行

★定価はカバーに表示してあります

|     |         |
|-----|---------|
| 著者  | 藤本ひとみ   |
| 発行者 | 若菜正     |
| 発行所 | 株式会社集英社 |

〒101-50

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話 東京 (230) 6393 (販売)  
(230) 6268 (編集)

350円

(本体340円)

|     |                          |
|-----|--------------------------|
| 印刷所 | 株式会社美松堂印刷所<br>中央精版印刷株式会社 |
|-----|--------------------------|

---

© HITOMI FUJIMOTO 1985

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁の本はご面倒でも小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-610788-0 C0193



COBALT-SERIES

リング♥どりいむ  
女子プロレスは華やかに

集英社文庫



## 目次

リング♥どおりいむ ―― 女子プロレスは華やかに ――

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 誘われて女子プロレス .....      | 6   |
| いっきに対立、みんな敵 .....     | 21  |
| なんとも激しい新人生活 .....     | 41  |
| 愛をかけての大決着 .....       | 76  |
| とつぜん蘭の花束が .....       | 92  |
| あざやか華やか空中殺法 .....     | 108 |
| いったいどーなるタッグの行方 .....  | 130 |
| 涙の決意、最後の試合 .....      | 165 |
| 初恋の、ときめきぶつとぶ新展開 ..... | 191 |
| 思わずドッキリ不吉な予感 .....    | 205 |
| いきなりヒールの、ど迫力 .....    | 212 |
| 天童つぶし .....           | 230 |
| アキラ・スペシャルに乾杯 .....    | 255 |
| あとがき .....            | 264 |

カット／あさくら・みゆき

リング♥どりいむ

— 女子プロレスは華やかに —

## 誘われて女子プロレス

「アキラッ、てめー、はっきり返事しやがれ」

この男言葉吐<sup>は</sup>いてんのは女の子。

アキラって呼ばれてるほうも女で、実はあたし。

晶と書いて、あきらって読むんだ。

死んだ祖父が与<sup>よ</sup>謝<sup>さ</sup>野<sup>の</sup>晶<sup>あきこ</sup>子のファンでさ、彼女の名からとったんだって。

おっと、のんきな説明してる場合じゃなかったっけ。

なんせ今、スケ番連中にとりかこまれてるとこだもの。

夕暮れの公園、出入り口には見張りがたって、通行人を追っばらってる。

「てめーの空手の腕、かりたいってんだよ。てめーもまえは、ちったあ名あ知られたツツパリだったんだし、もう一度戻るだけのことじゃねーか。いいよな、はいるよな仲間」

くそっ、安全カミソリの刃ぴたびた押しつけやがって。

両腕つかまえられてなかったら、正拳<sup>せいけん</sup>、ぶっくらわしてやるところだぜ。

「なんだよ、その目は……えらくにらむじゃねーか。かわいい顔にペケマークつけられてえのか。この二枚刃でざっくりやられた日にゃ、縫合<sup>ほうごう</sup>もできねえぜ。傷跡見ながら鏡の前で一生泣きてえのかよ」

あほか、てめーは！

そんな暗い人生、送りたいバカがどこにいる。

くだらんこと聞くなっぺんだ。

「さあどーすんだい。こっちゃあ気がみじけえんだ。答えてもらおうか、さあっ！」

気の短いわりには、さっきから長々ゴタクならべてやがるな……。

あたしは大きく溜息<sup>ためいき</sup>をついて、ぼそつと言った。

「うっせーな。ガタガタぬかしてねえで、好きにしたらいいーだろ」

昔も今も顔は女の命だと、男たちは思っている。

将来、一度くらいは結婚もしてみたいから、その命、傷もんにしたくはないけど、二度と昔の仲間にゃ戻らないって約束しちまったんだもの、しょうがない。

「へえそうかい……おまえも天童<sup>てんどう</sup>との約束が大事な口かよ……天童なんて、あんな腰ぬけ」

あたしは思わず目をむいてそいつにとびかかりそうになって、自分の腕を両側からがっちりおさえこんでいる連中を、ずりずりとひきずった。

「も一回言ってみろ。てめえ、三つに折りたたんで、コインロッカー暮らし、させてやるぜ」  
 天童というのは、ちょっと前、このあたり一帯をしきっていたスケ番連合の長の、てんどうまさみ天童正美のことだ。

そのころあたしは、学校もおもしろくなく、家もうつとうしくて、刺激を求めて夜の街をうろつく不良少女だった。

幼稚園のころからならっていた空手の腕に自信があったから、けっこう強がって肩いからせて、頼ってくる女の子なんか数人従えてさ、まあいいカッコしてたってわけ。

それが、ちょっとしたことから暴力団のお兄さんとかかわるようになって、あたしは全然知らなかったんだけれども、いつのまにか利用されて、こりやヤバイんじゃないかって気づいたときには、もうヌキサシならない状態だった。

ヤーさんの仲間ってのは、はいるときはしごく楽、ところが出るときにやあむずかしい、今の大学とちやうど逆だね。

もつともヤクザ組織なんてのは、くにさだちゆうじ国定忠治の昔から、反体制的なものと相場が決まってるから、受験制度を逆手さかてにとってるのも、まあ、ある意味じゃ理にかなってるような気もするけど、とにかくとにかく、あたしは内部事情を知りすぎちゃったもんで、絶対しゃべりませんなんてお約束ぐらいじゃ放してもらえそうもなく、ああこのままズルズル深みにはまり、行きつく果てはヤーさんの情婦かと、思えば思うほどまともな生活が恋しくなっていて……でも、実

際、どうしようもなかった。

それをすっぱり足ヌキさせてくれたのが、当時、くだないゴロまきから知り合った天童さんだった。

そのころすでに、かなりの数の番格を配下においていた天童さんだったけれど、心配する彼女らをひとりも連れずに、単身ヤーさんのところにのりこんだというそのときの様子は、いまだもって彼女の武勇伝のひとつに数えられている。

その肝<sup>きも</sup>のすわり具合にヤーさんたちは思わずうっと息をのみ、若頭<sup>わかがしら</sup>からは、ぜひ正式に組み入りにして、アネさんという話も出たそうだが、もちろん天童さんがうけるわけもない。

そしてあたしはといえば、この人のためならなんでもできると思ったんだ。

それからあたしは熱心な天童さんの崇拝者<sup>すうはいしや</sup>、いわゆる天童党と呼ばれる一派のひとりになって、どこに行くにも彼女にくっついて歩いていた。

天童党の連中ってのは皆、大なり小なりあたしと似たような経験をして、彼女に心酔<sup>しんすい</sup>して集まってきたんのばかり。

中には鑑別生活の経験者や年少（少年刑務所）くらったなんて奴もいて、その中であたしはたいしてめだつ存在じゃなかった。

でも、気の強さと、けんかつ早さじゃあ一番だったな。

やがて天童さんはスケ番連合の解散を決め、皆にまともな暮らしをするように誓わせて、卒

業式をし、東京の大学に行った。

その見送りのときにやあ、駅が埋まるほど人が集まったもんさ。

皆で押忍オスの連呼れんこをして送り出そうと話が決まっていたんだけど、天童さんが、もう堅気かたぎになつたんだからそりやまずいと言うんで、皆、思わず考えこんじまった。

堅気の学生はこーゆーときどうすんのか、なにしろだれにもわからなかったんだ。

すったもんだのあげく、歌でも歌ったら可憐かれんな女子学生にふさわしいんじゃないかねえかと、気のきいた奴が言い出して、そーだ、それがいいということになったんだけど、さて歌の内容でまともめた。

明菜やマッチの歌じゃあ、天童さんの門出としてはあまりにも品がないし、といって品のあつるような歌はだれも知らん。

とにかく、まともに学校行つてゐる奴っていないなかつたんだから。

あーでもねえ、こーでもねえと言つてゐるうちに発車の時間がきちまつて、しよーがない、運転手に一発くらわせて歌が決まるまで電車止めとけ、なんてゲキをとばす奴も現れて、ついにたまりかねた天童さんが一声。

「『君が代』でいい」

ああ、あのスモウの閉会式のときのやつか、あれならなんとなく重々しいぜ、ということをやつと皆が心をあわせて、その厳肅げんしゆくなメロディーの中、天童さんは旅立っていったんだ。

結構堅気らしくできたじゃねえか、これでりっぱな女学生だぜい、と、皆、満足げだったけど、あたしはしっかりと、駅長さんから言われたんだ、女の方たちだけの右翼団体って、めずらしいですねえって。くそ！

それから四年、天童さんを知る連中は皆、誓いを守って静かにしていたけれど、しだいに新しいバカどもが芽を出して、モソモソと派を作り始めたってわけだ。

「言ってくれるじゃねえか。ま、顔じゅうナマスみてえになりかけたら、その強気もかわるだろうぜ……よし、まず、あごからだ」

脇にいた奴がいきなりあたしの前髪をひつつかんで、ぐいと後ろにひっぱった。

あたしはのけぞって、反動であごを出した。

瞬間、カミソリをはさんだ指がヒュッとふり上げられ、あたしは思わずぎりつと奥歯を噛んだ。

くそっ、勝手にしやがれ。

一枚や二枚、切れ目があったほうがハクがついていいや。

自慢じゃないがやたらと童顔、高三のいまだに中学生にまちがえられちまうってみごとなものなんだからな。

そのとき、バチッと小石のぶつかる音がして、カミソリの刃が手からはじきとばされ、あたしの頬を浅くかすって地に落ちた。

驚いて振り返った皆の視線の先で、ガサッと公園の茂みがわれて、グレーのジョギングスーツが現れた。

「腰ぬけとは、よく言ってくれるじゃないか」

ニヤッと笑った不敵な口元。

あたしは目を見開いて、その、なつかしい、据えたような三白眼さんぱくがんを見た。

天童さんっ!?

信じられない気がした。

でも天童さんだ!

帰ってきたんだ!

「ためしてみるかい、てめえの言う腰ぬけってのがどの程度のもんか」

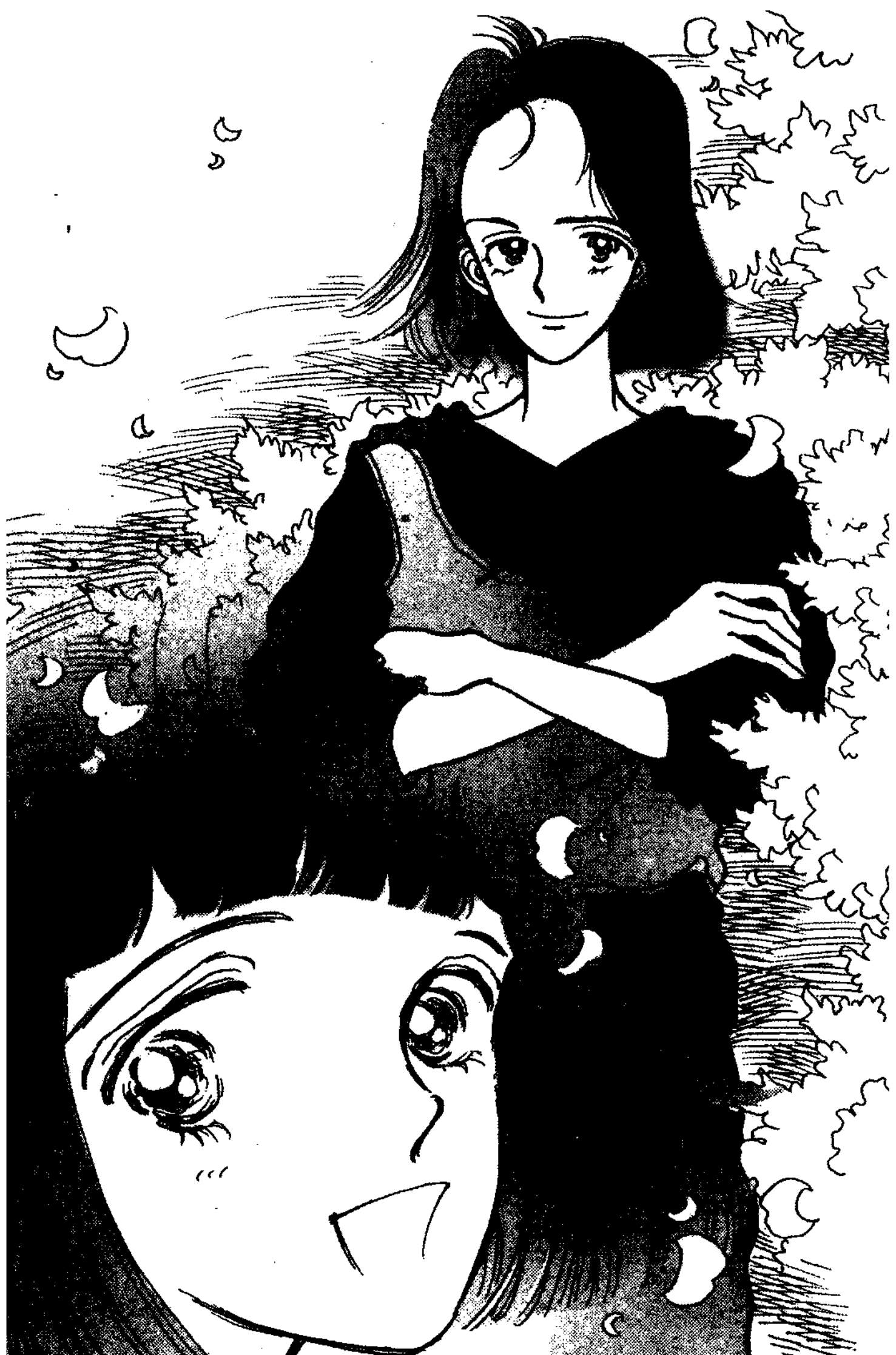
言いながら天童さんは、身長百八十五、体重七十七キロの堂々としたその全身を茂みから現した。

切るような視線で、すばやく全員をなめまわしてから、おもむろに、頭とみてとった正面の奴をぐっとにらみすえる。

その迫力!

そんじょそこらのチンピラに、一朝一夕いちちよういつせきにまねのできるすごみ方じゃない。

ああやっぱり天童さんだ!



あたしは、わくわくしてくるのをおさえられなかった。

この様子じゃ、相当怒ってる。

となると、久しぶりに大暴れおおあばできるかもしれない。

ああ血が騒ぐ。

とにかく、あの誓い以来四年間、ケンカひとつせずいい子を守ってきたんだからな。

「そ、そんな……こ、こっちは別に、天童さんとことを起こそうなんて気は、全然……あ、あれは言葉の勢いで……」

すっかり、青を通りこしてまっ白になっちゃったそいつに、天童さんはつかつかと歩みよると、むんずとそのえり元をつかみ上げた。

よしいけ、天童さん！

一発、ぶちかませっ!!

ところが、あたしの熱い期待に反して、天童さんは、

「そりや助かる。こっちも、もめごととはオサラバした身だからな。……ま、てめえらがツルむのは勝手だが、素人まきこんだり、あたしの昔の仲間ひっぱり出したりしたら、ただじゃあすまねえと思いなよ。わかったかい!!」

「わ、わかったよ」

「おりこうさんだ。じゃ、行きな。見送ってやるからさ」

あたしががっかりするほどあっけなく、彼女は仲間をまとめてひきあげた。

たまりにたまったフラストレーション、いっきに浄化できるかと思ったのに……。

あたしが、おもしろくなさそうにジャリをけとばしたり、水銀灯に照らされた桜の幹みきにまわしげりの当て身を決めてみたりしていると、天童さんは放り出されていたあたしの学生カバンをひろって、はらい、片手でぐいとかんであたしにさし出した。

「久しぶりだな、アキラ」

あたしは、ちょっととれながらうなずいた。

天童さんの視線は昔とかわらず、まぶしい。

強く、堂々としてこっちの心にさしこんでくる。

「今、おまえんちに行ったら、まだ帰ってこないっていうから、こんなことじゃないかと思っ  
てさ。だけど……ずいぶんがまん強くなったもんだな。ほめてやるよ」

言って天童さんは、からかうように、その目に笑いをにじませた。

あたしは苦笑して、頭をかいた。

「そりゃあ、約束だから……。だけどときどき、こう、ぱあっと暴れたいなんて思っちゃって  
……がまんして、道場で木偶でくなぐってるけど……」

天童さんは吐息といきをつきながら、地面に置いてあったボストンバッグに手を伸ばし、それを肩にかつぎあげた。